華僑社会とコミュナリズム

—特に北ボルネオ（Sabah）の場合について—

須　山　　卓

1　はじめに

マレーシアは近代化を志向する伝統的社会であり，また同時に国民的統一の問題をかかえた多人種社会（Multi-racial Society）である。この国民的統一の問題は他の東南アジア諸国とは異なり，マレーシア自体の内包した解決困難な問題のなかでの重要な1つになっているが，それは複数の人種的社会によってマレーシアが営まれているという事実に根差した問題である。もちろん，このような人種的問題は他の東南アジア諸国のみならず，ほとんど全世界の諸国がかかえている問題である，との反論も出てきようが，しかし，マレーシアにおいては，マレー人が1963年9月マレーシア・デイとして現在の地域統合を実現した以前の状況下において，すでにその国の全人口の過半数にも達しなかったのみかまた，マレーシアという名のもとに地域的統合が実現している現在の状況においても，非マレー人との対比において，ほぼ同数に近いという現実が問題の深刻さを物語っているばかりでなく，そのうえ経済的実権さえもほとんど非マレー人に掌握されているという事実が，一層この問題を深刻なものにしている。

マレーシアの人口構成は，種族的には3つの主要集団であるマレー人，中国人，インド人の3人種によって占められている。こうした人種的な背景がつぎのような側面において問題を複雑なものにし，解決を困難にしている。すなわち，その(1)はそれぞれの種族に代表されている3種類の社会，その(2)は，同様に3種類のナショナリズム，その(3)は，同様に3種類の文化等の問題が，相互に問題をはらみながら同一の政治的単位の中で，併存しながらしかも解決（融合）しないままの状態でマレーシアが営まれているところに問題の複雑さがある。しかも，そのうえボルネオ地域がマレーシアの中に政治的に統合されたことは，如上の問題をさらに複雑化する観さえ呈している。もちろん，それには地域主義的な要素が新たに加わったというだけでなく，本来各人種固有の宗教，言語，風俗，習慣などの諸要素の分離的な併存は，ただに人種的裂開（ethnic cleavages）を生む基礎となっているばかりでなく，この場合はさらにその基礎を矛盾的に拡大化する結果に陥れている。もしもそうした状況でなく，同一の政治的単位の中に，共通の宗教，言語，人種，慣習に基づく連帯の諸パターンが存在すると仮定するならば，そこには当然少くとも種族的一体感（種族意識）を生む原因となったであろうし，また，端的には国家的統一の要めであり，核心となる忠誠心をもかちとることができたであろう。ところが，マレーシアはそ

れとは逆に異質のものが併存している社会であるというところに深刻な悩みの種がある。

マレーシアのような人種的・文化的複合性の強い国家・社会においては，前述のような中国人，インド人などの異種的な人間集団が外部からの移入（external attraction）することによって，深刻な文化的複合性（cultural pluralism）の問題を発生させる結果になったが，この問題の本質をきわめて平面的な形で輪郭的に説明したのは，いわゆる社会経済学派といわれるフアーニバル（J. S. Furnivall），ブーケ（J. H. Boeke），フランケル（S. H. Frankel）およびエーマーソン（R. Emerson）などの学者である。これら学者の所説をここに引用すること自体，きわめて問題であり，批判されるところも多いであろうが，問題の所在の性質からして，その理解の具体的手法としてこれを利用することはこの四者の所説が当否かどうかについての一般論をいまここで論ずる必要はないであろう。それ故に，ここでは主題との関連でフアーニバルおよびブーケ両者の所説を問題にしたい。

まず，フアーニバルは複合社会（plural society）を定義づけて「同一の政治的単位のもとに異なる若干の社会集団が分離したまま併存し，混存するけれども融合しない社会」をさしていうと説くのであるが，かかる複合社会を構成する主要の集団はコンミュナル[(1)]もしくは人種的区分に基づいてしばしばその基準にされる場合が多く，しかも，これらの特徴が同時に存在するところでは，社会集団の間に広くかつ深い分離的なギャップが現われるのである。

つぎに，ブーケはフアーニバルの複合社会に対して二重社会（dual society）という言葉を当て，その理論的な立場を貫いているが，彼によれば，インドネシア社会では「輸入された西欧資本主義社会」（an imported Western Capitalism）と，土着の「前資本主義的農村社会」（a precapitalistic agrarian community）が，それぞれ固有の２つの異なる「社会経済体制」（social-economic stystem）として同時に併存し，両者間に一方から他方へ移行するというような「過渡的」関係が存在することのない「二重社会」「二重経済」なのである。この場合の土着社会は，外部からの impact にもかかわらず，「閉鎖的・停滞的」である，と説くのである。

この両者の所説は，[(2)]いずれも同一の政治的単位のもとに，それぞれ固有の宗教，言語，慣習，或いは思考様式，組織形態をもつ複数の社会集団が相互に融合することなく，分離したまま併存しているとみる点で共通している。こうした状況での原則が若干の低開発社会（underdeveloped society）に適用される場合に Communalism もしくは plural society という言葉が使用されるのである。

まさに，マレーシアは現在まで依然として，こうした環境と条件のもとにあって各文化集団は一定の政治的妥協によって商業と政治目的のために相互に影響し合いながら分離した（統一性のない）社会生活を維持し続けているのである。それ故に，事実，マレーシア国家・社会はその国家政策を推進するさいの困難性は，基本的に[(3)]はマレーシアが単一民族による国家・社会でなく，いわゆるマレー人，中国人，インド人の間に存在する政治的，社会的，経済

的状況の中に一定の対立が含まれているという意味において，コミユナリズム社会と呼ぶことができるのである。前後するけれども，第一表に示したつぎの人種構成は端的にそのことを表わしている。

第1表　マレーシア・シンガポールの人種構成　（単位：万）

	マレーシア					シンガポール	
	マラヤ	サラワク	サバ	合計	%	シンガポール	%
マレー人	362	53	32	447	52	24	14
中国人	267	24	11	302	36	128	75
インド人	81	—	—	81	10	14	9
その他	13	0.8	0.5	14.3	2	4	2
合計	723	77.8	43.5	844.3	100	170	100

（出所）　Malaysia Government : Malaysia in brief (1964) p.8

この場合，インド人は，マレー人や中国人（華僑）に比べると数的にも少なく，政治・経済・文化の種族的レベルにおいても，マレー人や中国人のごとく，複合社会の構成基盤となるほど，決定的な役割を果しているとはいえない。この意味においてマレーシアにおけるインド人の存在は，マレーシアの複合的社会構造の現実面においては，それほどインテンシイブにあらわれていない。したがってマレーシア・コミユナリズムが人種間の対立的かかわりのなかで，重要視されるのはマレー人と中国人との間の対立関係である。(4)

このようにコミユナリズの問題をマレー人対中国人の関係に焦点を絞って考察する場合，つねに例証的に指摘されるのは，フイリピンとインドネシアの場合である。この両国では中国人（華僑）の人口数は総人口の約5％程度にもかかわらず，華僑を自国内の経済生活にいかに融合させるかに苦心が払われており，小売業の分野ではそれに一定の統制を加える意味もあって，インドネシアでは Indonesia-Nationalization の傾向が強く打ち出されており，また，フイリピンでも27業種にわたって統制が実施せられ，その地位と権利において差別が設けられている。ところが，マレーシアにおいては，華僑は約36％であるにもかかわらず，小売業への就業を禁止したり，或いは排除するためのきわめて非現実的なものではあるが，単なる制限措置さえも全く採られていない。また，他方，タイ国では華僑の同化問題に関しては，或る程度に成功をおさめているが，マレーシアではこうしたことは容易に実施することができない。種族的には中国人とタイ人とは，中国人とマレー人よりも密接な関係にある。ところが，マレーシアにおいては，ほとんどのマレー人が回教徒（Muslims）であるという事実は，ますます同化を困難にする原因にさえなっている。要するに，マレー人と中国人との間における社会経済的基盤の差異，さらには宗教・言語(5)・慣習などの文化的基盤の差異に基づいて形成されている政治的特権を相互に排他的に主張し合うところに，マレーシア・コミユナリズムの基軸が存在するものといえよう。

V.パーセル（V. Purcel）はマレーシアのかかる徴候に着目して，つぎのように断定し

ている。すなわち「東南アジアの社会の間で文化がとけ合うのは，非常に遠い将来に延ばされそうである。たとえば，マレーシアにおける各民族の社会は，政治的・経済的平等に近い何物かを達成し，共通のマレー民族感情を生ぜしむることはできるかも知れないが，今後いつまでも，かれらは違った文化の世界に住み続けるように思われる。」

しかし，もちろん，今日の華僑の〝中国人である〟（Chineseness）との古い感情や排他性は，過去に彼らが体験してきた圧力に対し，積極的な防衛のための心理的意識から生長したものと思われる。だが，彼らのこうした意識構造にもすでに変化の芽えが発生しつつあることは認めざるをえないであろう。パーセル氏のいう海外の中国人（華僑）がマレー人と文化的に融合するのは「非常に遠い将来」にまで延ばされるとする判断は，事実の反面を物語ってはいるけれども，その全体像を律するものでないことを知るべきである。何故なら，今世紀以降，海外の中国人は次第に定着化の方向に向い，第２次世界大戦後ははっきりとマレーシアに定住する気運を示しており，控え目な経済活動の中にも，一般の中国人の心情としては，自分たちの業績を地方の事情に積極的に誘導する必要性のあることを容認しつつあるからである。ただし，問題の本質は中国人のこうした態度に対して，マレー人としてどう受けとめるか，或いは起源的（original）に〝土地の息子〟（Sons of Soil）であるという理由だけで，擬制的に与えられた彼らの政治的特権をどんな形で貫徹するか，どうかにかかっている。しかし，現在のマレーシアの政治的メカニズムの動きは，この所与の特権のうえに一時的にせよ安息を求めようとする方向に向って強められつつあることが注目される。それだけに関連的に想起されるのは，つぎのいくつかのマレー人優先の政策的動向である。

その最大のものは，かってラザク首相が憲法改正にさいして提案したその内容についてであるが，彼はその提案の中で，人種間の不調和，経済面での不均衡の存在を確認したうえで，国家の統一と発展のためには，1969年５月の人種暴動の原因となった人種間の相互不信をかきたてる行動を絶対禁止しなければならないと述べ，この新しい国家統合の原理は，1970年８月30日のラーマン首相の辞任演説および翌31日の独立記念日における国王の演説のなかで示された (1)神への信仰 (2)国王と国家への忠誠 (3)憲法の遵守 (4)法による支配 (5)善なる行動と道徳の遵守という国是（Rukunegara）に従わなければならないと述べていることである。このこと自体は（本稿の主題の解明の中で）後にも触れるが，とも角，イスラムを信仰し，サルタン（土侯）および国王への忠誠を社会結合の基礎とするマレー人社会に対して，他の異質の人種社会の統合化を進めようとする意図に発していることが知られるであろう。アジア経済研究所の荻原宣之氏の言葉を借りるとつぎのように述べられていることが注目される。

「マレー人社会への他の人種社会の統合化を推進することは，各人種社会の文化的複合性の故に，そのことは至難のことといわなければならない。にも拘らずラザク新政権が，その方向をめざしていることは，土着の子としてのマレー人の政治的優位の保持のみが，

経済的には他の人種社会の劣位にたつているマレー人擁護の唯一の道と考えていることによるものと考えられる」さらに氏は言葉を続けて「ラザク首相の意図するような国民的統合に向うか，人種間の対立をより深刻化するか（私(荻原氏)は，この可能性の方が強いと考えるが）ということについては，今後の政治動向の推移を見守らなければならない。」[7]といっている。この論者の見解はかなり示唆的なものを含んでいると思われるので，[8]ここに引用した次第であるが，要はマレーシアの両人種間に余りにも明瞭にギヤップとなって潜在化している政治上，経済上の違和感をどのような形で，しかも目で見えるような形で調整できるか，どうかこれこそ将来のマレーシアの政治動向に課せられた最大のキー・ポイントであろうと考える。とりわけマレーシアのように歴史的経過のうちに人為的に形成されてきた複合民族国家の性格からして，万一，その内的矛盾の解決が一歩誤まれば，激動の危険性はきわめて大きいものと考えざるをえない。かかる意味において，したがって，またその問題の意識においてマレーシアが歴史的に内包しているマレーシア・コミュナリズムの解明は，当面のきわめて重要な課題の一つであると考えられる。本稿では，とくに現在のマレーシア諸州の中で従来英領植民地であり，北ボルネオ（British North Borneo）と呼ばれたサバ（Sabah）について，その地域での中国人（華僑）およびマレー人のコミユニテイに存在するコミユナリズム形成の社会経済的基盤およびその特徴を解明することに主眼をおいた。なお本稿は昭和46年度文部省科学研究費による「華僑問題とコミユナリズム研究—特にマラヤ連邦・北ボルネオにおける地域スタデイを中心にして—」によって得られた中間報告の一部にすぎないことを付言しておきたい。

註 (1) J. S. Furnivall; Colonial Policy and Practice, Cambridge University Press, 1948, p.304.

(2) J. H. Boeke; Economics and Economic Policy of Dual Societies as Exemplified by Indonesia N. Y. 1953, pp.324

(3) R. S. Milne; Government and Plitics in Malaysia, 1967, Boston, p.229.

(4) 戸谷修「マレーシア・コミュナリズムの社会・経済的基盤とその克服」，アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究』—精神構造を中心にして—御茶の水書房刊，1969年，45ページ

(5) R. S. Milne; op.cit, p.5.

(6) V. Purcel;「少数民族の勢力」P. W. セイヤー編『東南アジアの民族主義』深見秋太郎訳，日本外交学会　昭和34年，281ページ

(7) 荻原宣之「マレーシアの憲法改正と国民的統合」拓植大学海外事情研究所，『海外事情』第19巻6号，1971，23ページ

(8) 荻原宣之「前掲書」24ページ

II　サバにおけるコミユナリズム形成の社会経済的基盤

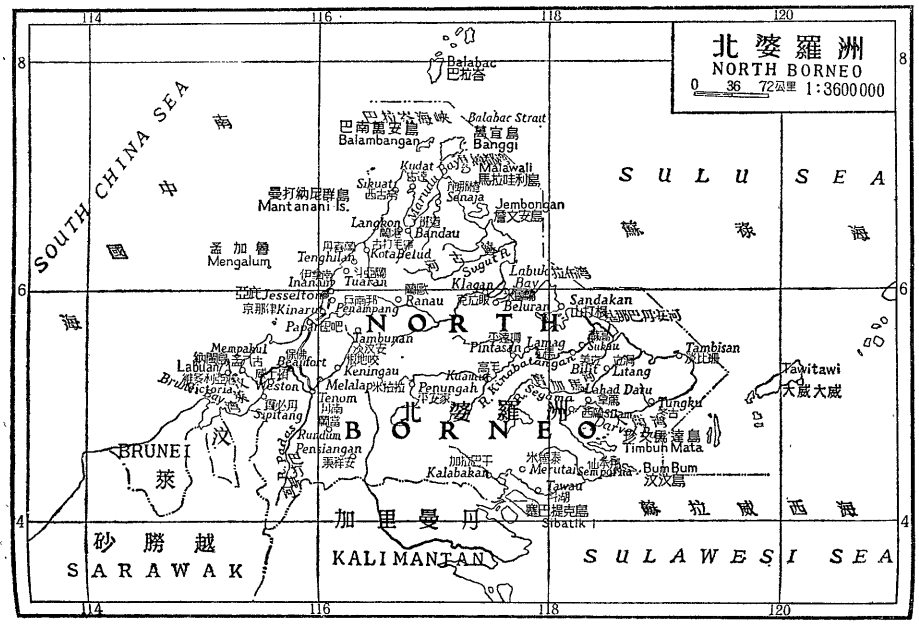
(1) 華僑略史とコミユニテイ

現在のサバは1963年マレーシアに統合される以前には，ボルネオと呼ばれ，とくに英国の Crown Colony となった面積29,388平方マイル（約アイルランド広さ）の地域を称して北ボルネオ（British North Borneo）と呼んだ。隣接国にはブルナイ（Brunei），サラワク（Sarawak）およびインドネシア・ボルネオと呼ばれている旧蘭領のカリマンタン（Kalimantan）がある。歴史的にボルネオと最も早くから接触をもったのは中国人であろう。中国の文献によるとボルネオの名称が初めて現われたのは，紀元502～556年代の梁朝の記録の中に“Poli”といわれているのがそれである。唐の総章２（669年）には中国に入貢し，名づけて“波羅(Polo)”と呼び，また宋の太平興国２年（977年）にも中国に入貢して名づけて“渤泥”と称したとある。[(1)] ここでは両者が同一音であることが注目される。すなわち　梁朝の“Poli”と唐代の“Polo 波羅”は音がきわめて相似的であるので，恐らくは波羅のことであろうと思われる。[(2)] 果してそうだとすれば，梁朝記録の Poli は文献によると，広東の南西部に位置した海島の王国（Kingdom）であって，旅程２カ月を要する距離にあった。この国の東から西に至る距離の幅は旅程で50日間を要し，また北から南へのそれは旅程20日間を要した。国内には136箇の村落があり，気候は温暖でちようど中国の夏のようである。米は年２毛作であり，作物や植木も豊富である。海産物も斑点のついたほら貝や貨幣として用いられる貝殻が沢山ある，と述べられている。この歴史的な記述は今日のボルネオを多少ともある程度連想されるに足るものとして読みとることができよう。[(3)] また，宋史によれば，元豊５年（1802年）ボルネオは再び中国に入貢したとあるが，そのときの使者は帰途泉州からの乗船を乞うているが，このことは，その当時すでに中国商人と彼地との間に海上往来が多く行なわれていたことを周知していたものと思われる。[(4)]

この頃のボルネオに対する中国貿易の状況を，宋の趙汝**适**の『諸蕃志』はつぎの如く記述している。

蕃船（外国船）が入港すると，その王は眷属や侍臣を帯同して船に到って労をねぎろう。船人は一行を床板に絹を敷いて鄭重に迎え，金銀・器具・敷物・日傘等を土産物として一行の地位に応じて献上する。船が碇泊して人びとが上陸しても直には貿易を行なわない。商人等は先づ一行に中国の酒食を献ずることになっている。それ故に中国船が当領にくるときは，必ず腕利きの料理人１・２名を伴って来るのを例とした。１日と15日の年中行事に王宮を訪問し賀礼をすませ，月を経てのち品物の価格を決定せられんこと請い，価格が定められた後には太鼓を鳴らして遠近の人びとに取引を行なわしめる。価格が決められないうちに密取引をする者は処罰されるが，商業を重んずるの風習があるので，罪は死刑に相当しても犯人を殺さない。船が出帆する前に王は餞別の意味で酒や

牛を以て船員をねぎろうほかに，初めに船員が献上した品物に該当する竜脳，蕃布などが贈られる。貿易事務が終っても，6月15日の仏節まで滞在して出港しないときは風濤の厄があると信じられている。


北婆羅洲
NORTH BORNEO
0 36 72哩 1:3600000
SOUTH CHINA SEA
南中國海
SULU SEA
蘇祿海
SULAWESI SEA
蘇拉威西海
NORTH BORNEO
北婆羅洲
BRUNEI
汶萊
SARAWAK
砂勝越
KALIMANTAN
加里曼丹
Balabac
巴拉巴
Balabac Strait
巴拉巴海峡
Balambangan
巴南蘭安島
Banggi
萬宜島
Malawali
馬拉威利島
Mantanani Is.
曼打納尼群島
Mengalum
孟加魯
Sandakan
Tambisan
Tawitawi
天威大威
Timbuh Mata
Bum Bum
汶汶島
Tawau
Sibatik I
Kalabakan
Merutai
Semporna
Lahad Datu
Tungku
Sipitang
Pensiangan
Tenom
Melalap
Penungah
Keningau
Tambunan
Pintasan
Lamag
Sukau
Beluran
Ranau
Kinarut
Jesselton
Papar
Labuan
Bruneiton
Victoria
Weston
Beaufort
Membakut
Tenghilan
Kota Belud
Bandau
Langkon
Sugut
Labuk Bay
Klagan
Tuaran
Inanam
Sepulut
Sinsuat
Kudat
Sanaja
Jembongan
Malawali
Bluff
Litang
Lungkut
Lahad Datu
Tambisan
Sukau
Lamag
Pintas

ではいわゆる中国人が一ボルネオへの移出入によって，彼ら独自のコミュニテイを形成し，文化的・宗教的・言語的複合性の問題を顕在化する程までに発展して，他種族に対して影響力をもたらすほどの主体的条件といい，また客観的な条件はこのときまではまだ成熟していなかったことが観察される。けれども，こうした状況の中でも不断の歴史的発展は，そのつぎの段階の到来において，中国人のマレー人に対するコミュナルな影響は，ボルネオ地域の経済的開発に随伴して漸次その変容をみることになる。

この歴史的契機となったのは1292年（元の至元29年）元の世祖がボルネオを征服した前後からそのスタートを開始することになる。当時，元の世祖はボルネオを征服すると同時に彼地のキナバタガン（中国名：支那巴坦加，中国河）の流域に中国の省区を設け，中国人総督・黄昇平（Ong Sum-Ping 或いは Ong Ti-Ping ともいわれ黄森屏の字を当てているが，詳細は不明）を命じてスルー群島を兼管せしめたが，先づここでは，黄昇平なる者の歴史的事蹟について主題との関連において言及しておく必要がある。

すなわち，スルー史によると，その頃黄昇平は中国皇帝の命を奉じてボルネオに来り，キナバルの山中で宝石を探し求めていた。やがて彼はキナバタガンから中国人部下多数を引率してブルナイへ移住し，土地のサルタン（土侯）アクーメッド（Akhmed）に自分の娘を嫁がせた。やがてサルタン・アクーメッドと，この中国人妻の間には女子が生れたので，その娘はアラビアの Taif から渡来したというサルタン・ビルカット（Sultan Bêrkat）に嫁がせた。[(5)] サルタン・ビルカットは祖父 Huslin の予言者の子孫として，ボルネオにおいてイスラムの信仰を広め，マホメッドの戒律とモスク（回教寺院）の建設に奉仕した。サルタン・アクーメッドの王位は代々女系によるものとせられ，およそ20余代を継承している。[(6)] サルタン・ビルカットに嫁した娘もそれに順じて王位を継承したが，これは現在のブルナイ王の始祖とせられている。

これらの史実については，中国の史書には全々その記述をみないが，[(7)] ただ伝えられるところでは，ボルネオ北西部に居住しているイダハン（Idahan）族の間には今なお自分らは黄昇平の子孫だと思い込んでいるものが多いということである。しかし，このような形での伝承や一片の史実をもってしては，信憑性は比較的に少なくまた主題の本質を実証する資料的内容としても不十分である。一般にいわれているように「一羽の燕はいまだ夏の到来を意味しない」のと同様に，ある程度の大量観察のための史料の積み重ねが必要とせられる所以である。

しかし，ボルネオに関する史料についてはやがて夏を告げる大量の燕の到来を知らしめるのは，歴史的には15世紀の初め鄭和の遠征の足跡がボルネオに及んだのを契機に，華僑の移住者はそれに従うものきわめて多くなり，16世紀にわたって中国移住者は本格的に増加することになる。15・6世紀の交にはボルネオのサルタンは胡椒の栽培および通商上の目的から中国移民を招致したが，中国のジャンク船は毎年東北季節風を利用して来島し，ボルネオの香料・燕巣・魚翅・樟脳・籐・珍珠等を仕入れ，西南季節風に乗って帰航し

た。また，移住した中国人は独身の男子が多かったので，土着原住民のマレー人やダイヤ族(8)（Dyaks）と結婚して混血児が繁殖した。或る著者はその理由をつぎのように説明している。

「中国人は勤勉な人種であり，この国（ボルネオ）の土着原住民よりも優れた特徴を備えている。これは主として教育に由来するのである。したがって中国人と結婚して一緒になるということは，早くからのボルネオの通例であった。また，宗教，慣習においても少くとも男系（中国人男子）のそれに従った。将来のボルネオの支配者として，この種族の問題に注意を向けることは重要である」と。

また他の事例では，中国人と結婚して混血児(9)を作っているのはヅスン族（Dusuns）の場合が多い。ヅスンというのは，マレー語の園芸人（Orang Dusun, Men of orchards）という意味であり，マレー人はボルネオの土着原住民の大部分をヅスンと呼称した。彼らは長服を着し頭に金属装飾品を戴き中国人と全く同じで，また稲作栽培法も中国と全然同一である。彼らの伝説によると自分らを中国人の後裔と称し，最初中国人はクリヤス（Klias）河にきて胡椒の栽培に従事し，彼らの婦女を妻とし，また中国から親族友人を呼びよせた。その後洪水の災害やムルット人（Muruts）の襲撃を避けてブンツ（Bundu）高地に住居を移し，ここで次第に子孫が繁栄したので，それが今日のヅスン人となったといわれている。その後，中国人の店員，園丁，技工等の階級まで土着婦人と結婚する風習があったので，(10)漸次混血児は増加していった。だからといって，一般原住民が中国人の言語，習慣，文化などを全面的に取入れたわけではない。混血児による文化受容の仕方は，教育の程度によって様々であるが，例えば西マレーシアの中国人とマレー人の混血児（Sino-Malayan race）の場合は，中国人の伝統と慣習は多少ともはっきり観察されるが，しかし長年のうちには本来の生活は未経験のため少しづつ外面上の変化が起り，終局的には根本的な差異が存在するようになる。事実上，これら Sino-Malayan race といわれる混血児は表面上は知識と生活様式によって(11)違った社会的特質を示しているが，その理由としては彼らの本来の固有の社会的特質と種族的な人類学的な側面などの多くの特徴が複合的に彼らの生活体系に反映されているためである。とりわけ，ボルネオ地域においては，つぎにみるように数多くの少数種族が割拠して居住地域を異にし，慣習，宗教，言語の交渉は彼ら独自の国民的形成を相殺し，主人公たるマレーシア国民との間の関係に不完全にしか統合されない特色を生んでいる。

種族名	宗教	居住地域
ヅスン族（Dusuns）	異教徒	カリマンタン及びサラワクに近いムルット人の居住地域以外の内陸各地。
バジヤウ族（Bajaus）	回教徒	海岸地方一帯ならびに北東岸の島嶼。
ムルット族（Muruts）	異教徒	カリマンタン及びサラワクに近い地方ならびに内陸地方の丘陵地一帯。

イラヌン族（Illanuns）	回教徒	北西岸の一部
ブルネ族（Bruneis）	回教徒	ゼセルトン以南の海岸。
オラン・スンゲイ族（Orang Sungeis）	回教徒	キナバタガン河及びその他の流域。
ケダヤン族（Kedayans）	回教徒	ボーフオートの南海岸。
ビサヤ族（Bisayas）	回教徒	パダス河の下流。
スールー族（Sulus）	回教徒	サンダカンその他の北部の海岸。
テイドウン族（Tidongs）	回教徒	タワオ，シリムポポン附近。

北ボルネオの主要語はマレー語であり，ついで中国語，英語となっている。マレー語はもっとも普及して現在ではそれを多少とも解しない地方はない位である。しかし，奥地地方のムルット族は海岸地方との接触がほとんどないためマレー語を全々知らないものが多い。その他，土着語としてヅスンあるいはムルットなど各種族特有の言語があるが，同じヅスン語でも部落が分れる毎に異っており，その数は甚だ多数にのぼっている。

また，宗教も多岐多様であって，もっとも多いのは異教徒であり，これはむしろ邪教に近いものである。ついでイスラム(回教)，キリスト教，仏教の順位になる。とくに，回教の普及の結果，きわめて漠然たるセンスによってイスラムを信奉する種族を"マレー人"と呼ぶ傾向が多くなってきているが，これは基本的な種族的起源(ethnic origins)を理由にしたものでなく，ただ便宜的に彼らが回教徒(Muslims)であるということだけを理由にしたものである。しかし，こうしたルーズな感情の中には，マレー人として弱点となっている経済力のかわりに[12]，政治的な側面の力に依存しながら国家的な広い種族的な一体感を高め共通のマレー民族感情を醸成したいとの願いがこめられている。そして，現実的にはイスラムの信仰が引いてはサルタンおよび国王への忠誠心の結集に繋がり，異質人種の社会的統合を一歩前進さすのに大きな役割を果たそうとしている心情を見逃がすべきでない。

北ボルネオでの最大の土着民集団はヅスン族であるが，彼らは総人口の約3分の1を占め，ほとんどに近い住民が異教徒（non-Muslim）であるのに対し，それと対照的に単一集団とみられる最大のバジヤウ族は，住民の38%まではイスラムの信奉者である。しかも，この種の種族の中で数的にマジョリテイ・グループとして見なされる集団は，その信仰を背景に今なお重要性を保持し，政治的団体（political parties）が結成されるさいには，大多数の意見として種族的・宗教的コミュナルの線に沿ってそれが実現されることを主張している。

要するに，[13]ボルネオをマラヤ（現在の西マレーシア）と比較すれば，以上にみてきたように，土着人種の数も多様であり，その宗教もまた回教，キリスト教，異教，仏教等々と雑多な現象を呈しているが，ただ一つのボルネオ領土において共通する現象は，人種的要因としての「マレー人対中国人」の関係である。中国人のマレーシア全土における人口は約42%を占めているが，そのうちマラヤに37%[17]，サラワク31%，そしてサバ(北ボルネオ)

に23%といった状況で分布している。

少し古典的文献に依拠するきらい[15]があるが，The Chinese Repository (VOL. 7. August 1838, p.186) の執筆者によると，ボルネオの種族は多数にのぼっているけれども，そのうちの基幹種族はジョホール・マレー人と中国人およびアラブ人 (Arab Serifs) の3種族であると述べ，とくにそのなかにあってボルネオでの Plough の役割を果したのは中国人移住者 (chinese settlers) であり，その主導によって行なわれた，と述べている。[19]

これに対比してマレー人の状況はどうであろうか。つまり，マレー人はイスラムの伝来する以前のボルネオに起源もつ人びとの後裔であるともいわれ，同一の伝統文化の保持者としての土地の子である。ボルネオでは主として沿岸住民であり，内陸部に長屋式家屋 (long house) に居住している土着原住民 (種族) とは明かに区別される個別家屋 (individual-house) に居住し"カンポン" (kampong) といわれる集落を造って生活しつつある村落居住者である。漁撈，水稲およびサゴの栽培を生業とし，伝統的手工業であるバスケット物の製造に従事するものが多い。彼らの職業の型はきわめて特異的であり，当今ではポリスと軍隊に集中し，その他少数の商業と国内サービスに従事している。

ともあれ，ここでも一度歴史の原点に帰えり，華僑の初期の発展史に眼を転じてみると，ヨーロッパ人がボルネオに到来する以前に中国人は島内においてかなり重要な地位を占めていた。1520年始めてスペイン人が渡来した頃は，ボルネオ全体が繁栄をきわめていた。大多数の中国人が海岸沿いに定着し，彼れらは産業によっていろいろな物品を生産したが，ジャンク船による中国との商取引は広範囲に及んでいた。1600年12月26日オランダの Olivier Van Noort という海洋冒険者がボルネオ島民との取引を求めて初到来したが，彼はボルネオ首長の案内役に中国人を雇い入れ"友人として，ただ自分の金銭で食糧，水およびその他の物品を調達したい"との希望を伝えた。この短い滞留期間中に現住民の貴族 (Orang K'aya'=Chief or First Class) 数名がオランダを訪問した。まもなく，中国人によりオランダは人質 (a hostage) をせしめようとしていると王に通報したので，それからボルネオ住民との間に戦いが始まった。オランダはこうした条件のもとで貿易を開始したのである。

ヨーロッパ人との引取が行なわれたすべての港では，中国人とのジャンク (Junk) 貿易が盛んであった。1702年イギリスがバンヂエルマシン (Bandjermasin, 中国名：文郎馬生・馬神) に渡来したときには，季節風(Monsoon) の期間に4隻のジャンクが停泊していた。ジャンクは各々長さ15メートル，幅4メートルのものであったが積み荷は陶磁器，絹，茶器，傘その他の貿易品であったが，サマラン (Samarang) から中国商人 (華商) およびジャワ人商人によって運ばれていた。これらジャンクの帰り荷は主として胡椒であった。[18]

これは明の張燮の『東西洋考』の「文萊」の条にもみえている記事であって，それによ

ると「文萊は即ち婆羅国，東洋の尽くるところ，西洋の自りて起る所なり」とあり今のブルナイ地方は当時の東洋針路と西洋航路の接合点となっていて，いずれの針路を選んでも到達できるとされているので，おそらく北ボルネオ方面へは東洋針路で，南ボルネオ方面には西洋針路で行ったものであろう。したがって，スペインもオランダも　そしてイギリスもこの両針路によって南北ボルネオに到来したものと思われる。先きに述べたのは，史料の関係で主として，ブルナイの反対側のバンヂエルマシン（旧蘭領，現在インドネシア・カリマンタン）の状況について述べたものであるが，北ボルネオ地域に限ぎってのヨーロッパ人の具体的な交渉は歴史的には1773年イギリス東インド会社がスール王の許可を得て，北ボルネオの北岸に面したバレムバンガン島（Balembangan Island）に商館を設けて植民的活動を開始したのをもって嚆矢とする。同島が選ばれた理由としては，インドと中国との間を船舶が往復するのに停泊所として便宜であり，また，中国貿易を側面から保護する戦略基地としても便宜であると考えられたからである。最初からイギリスの利害はボルネオの北部の部分に関して，戦略的理由に努力を集中した傾向があり，他方，オランダは商業的理由からボルネオの南部および南西部に集中したということを特記しなければならない。バレムバンガンの商館は1775年スール一族の襲撃を受けたのでラブアン島に移され，[19]別に新商館がブルナイに設けられることになった。1803年再び根拠地をバレムバンガン島に移そうとしたが失敗したので，結局1804年これを放棄し，北ボルネオに対する植民活動を断念した。ところが，その後シンガポールの勃興とともにボルネオとの通商もまたようやく復活し，[20]イギリス商人はとくに海上の安全と海賊の跋扈から護ることを希望した。この海賊を掃蕩し海上の安全を獲得するのに奮起したのが有名なジエームズ・ブルーク（James Brooke）であった。彼は1840年ボルネオに渡り，サラワク王ハシム（Hasim）の叛乱鎮定援助の請を入れてこれ鎮定し，ブルナイ王の信頼を博し，1841年ラジヤ（Rajah）の尊称とサラワクの統治権を獲得し，ついでイギリス政府の支援を得て2回にわたり（1843年，1845年）海賊の征討に従いまもなくこれを鎮定したのである。

イギリス政府は1847年ブルークの斡旋によってラブアン島をブルナイ王から譲渡せられ，ボルネオ植民の根拠を得るに至った。

1881年に至り有限責任の（British North Borneo Provisional Association）がロンドンに設立され，1881年11月1日に勅許状の下付を受け，1882年5月英領北ボルネオ特許会社が成立した。会社はウオルター・メッドハースト(Walter Medhurst)の監督のもとに移民の募集を開始[21]したので，当時すでに北ボルネオとシンガポールとの間には定期汽船の開通もあって，海峡植民地の土生華僑（僑生）が多数ボルネオに渡来するようになった。また，中国人労働者を補完するために中国本土からも移入された。しかし，この移民の方法は成功せず，多数のものが帰国したが，それにもかかわらず，中国人のコミュニテイは中国人の移入の多いクダット（Kudat）およびサンダカン（Sandakan）の両港において形成された。クダットは1881年に新たに発見されたところから最初の首府となった。このク

ダットにかけられた期待は，戦略上の地位だけでなく，沿岸貿易およびヨーロッパと中国

サンダカンの中国人街　（筆者撮影）

を結ぶ船舶の停泊地としての役割であった。クダットに移住した華僑としての多くの客家族（Hakkas or Khes　広東省の東北部の山岳地帯から一部は福建省西北部の永定県方面に散居している）はその大部分がキリスト教徒となり，幸福な生涯を送りその子孫は今日でもなお繁栄している。その後まもなくこの地方の資源が中国人資本家の注目するところとなり，中国人の土地開発会社が２社設立され，４万エーカおよび１万エーカの栽培地がそれぞれ特許を得た。

また1879年ウイリアム・プレヤー（William Prayer）[22]が根拠地をサンダカンにおいた当時は，同地の中国人はわずか２人にすぎなかったが，プレヤーは精力的に海賊と住民問題に取り組み中国人と土着原住民を直ちにその町に連れ来ったので，日増に人口は増加していった。また，ジャングルの生産物，木材，鳥の巣などのかなりの量の貿易品を復活させた。一方，さらに西沿岸の種族の首長に所属しない土地についてはつぎからつぎに略奪し，サンダカンを貿易の中心地化するとともに，北東沿岸地方もまた自己の特許会社に集中さした。その後，タバコの栽培が行なわれるようになって他の地域の価値を押しあげた[23]しかしながら，サンダカンは今日の他の主要港町―ラハ・ダトウ（Lahad Datu），センポルナ（Semporna），タワオ（Tawau）―と同じように大部分が特許会社によって創設されたものであり，原住民部落の引継ぎでないことが強調さるべきである。このことはL.C.A.ノールズ(Knowles)がその著『イギリス植民地経済史』（Economic Development ofthe Overseas Empire,1598―1914,Vol I）に指摘しているように，“輸入労働力による農業植民地”として北ボルネオが規定せられている特質そのものが中国労働者の入国・移住・定着化[24]を一層可能にしたものと思われる。事実，タバコ栽培事業の著しい発達は，その後東海岸のマルヅ湾（Marudu Bay）を始めとし，バンギ島（Banggi Island）など

1889年頃までに78の会社が創設され，その栽培総面積は70万エーカに達した。1857年にシンガポールから中国人契約苦力の移入数は390人であったが，1890年には7,223人に増加し，なおホンコンからも直接これを移入した。

一般的に言えば，北ボルネオの経済構造は他の東南アジア諸国とはたいした相違はないが，企業は比較的に大資本の投下（とくにタバコ，ゴムのエステートおよび木材企業など）を必要とし，そのため主としてヨーロッパ人が，また若干の富裕中国人が掌握している。[25] 労働力の僅少は土着原住民にもよるが，その大部分は中国人，ジャワ人であり，外部からの移入である。コミュニテイの商業および技工部門のはるかに大きな部分が中国人によって構成され，一方，土着原住民の大部分は自給農業に従事している。ことに中国人の農業従事者の移民は，如上のエステート企業および米作増産の目的から奨励された。[26] これに関連して『南洋華僑史』の著者李長傅はつぎのように述べている。

「1913年（民国２年）北ボルネオ公司はかって華僑苦力を募集し，北京イギリス公使は中国との間に中国人招募規則を協定したが，それは労働者１人につき土地10エーカを当て，労働者１人のボルネオ渡航費はイギリス側で負担し，２年以内にイギリス側から日給35セントを給し，３年後には１エーカの土地につき地租50セントを政府に納税することにし，中国は官吏１名を派遣し，イギリス官吏と立会って中国人苦力に関する事務を管理することとし，イギリス政府は中国人苦力のために農具を備え付け，苦力子弟のために学校を設立することにした。そしてその開墾地の半は米穀およびコーヒーの栽培に当てられたという。」[27]

1920年には中国人の植民計画が制定された。それによると北ボルネオにおいて家を作る希望をもっている現存植民の親族および友人に就いては，ホンコンより自由渡航を認め，ことに移住者に対する住宅，農具の供与など利便を計った。

また，これら政府の補助移民のほかに，政府の補助を受けない中国人移住者の入国数も相当あった。中国人の一般問題に関して討議するためサンダカンおよびゼセルトンには中国人顧問部（The Chinese Advisory Board)が組織され，それらの意見は当地政府に提出され，また，サンダカンには中国人が多いために中国人補助官吏を雇用し，中国の風俗，慣習の説明者および助言者に当てていた。

かくして，ボルネオの中国人は島内の開発過程における農業労働者としてだけでなく，商人としての勢力をも盛り上げた。その商店はいかなる辺僻の地にも存在した。彼らはすでに言及したように草創の時代から危険を冒して奥地に踏み込んでいた。また，彼らは異教徒である種族と共同生活をなしながらイギリスの領有当初から着々とコミュニテイの基礎を作り，一般に勤勉な種族として評価される存在であった。現地生れの僑生(local-born Chinese）および定着の華僑を加算すれば，その人口は相当の数に達することが察知される。要するに，今日のボルネオ華僑は農業方面の労働部門だけでなく，島内のほとんどすべての主要貿易中心地において大にして，重厚なコミュニティを形成することに成功した

といえるのである。

註 (1) Ta Chen;Chinese Migration,with specical reference to labour conditions, 1923, Washington. p.73.

(2) 李長傅「南洋華僑史」民国23年，商務印書館，60ページ

(3) Ta chen; opcit., p.74.

(4) 李長傅「前掲書」60ページ

(5) 李長傅「前掲書」60ページ，Ta Chen; opcit., p.76

(6) Ta Chen; opcit., p.76.

(7) Ta Chen; opcit., p.76

(8) 李長傅「前掲書」62～63ページ

(9) Ta Chen; opcit., p.77.

(10) 李長傅「中国殖民史」民国26年商務印書館，94～5ページ
半谷高雄訳「支那殖民史」昭和14年生活社，103ページ

(11) Song ong Siang; One Hundred years' Hisoty of the Chinese in Singapore, 1923, London, p.4.

(12) R. S. Miline; Government and Politics in Malaysia, 1967, U.S.A. p.52.

(13) R. S. Miline; Ibid., p.52

(14) R. S. Miline; Ibid., p.52

(15) Malaysia year Book, 1971. p.17

(16) Ta Chen; opcit., p.76

(17) Ta Chen; Ibid., p.76

(18) Ta Chen; Ibid., p.76

(19) Lee Yong Leng; North Borneo-A study in Settlement Geography, 1965, Singapore, p.20

(20) Lee Yong Leng; Ibid., p.20.

(21) 台湾総督府官房編『南洋年鑑』第3回版昭和12年，1057ページ

(22) Handbook to British Malaya, 1935, p.28

(23) Lee Yong Leng; opcit., p.26

(24) L.C.A.ノールス『イギリス植民地経済史』第1巻　岡倉古志郎訳，栗田書店昭和18年，43ページ

(25) P. C. Campbell;Chinese coolie Emigrant to countries within the British Empire, London 1923, p.15.

(26) V. Purcel; The chinese in Southeast Asia, 1951, London, p.436

(27) 李長傅「前掲書」66ページ

(2) 華僑コミユニティの現況と特色

北ボルネオの中国人人口は，手許資料によって考察すれば，1871年7,156人であった人口は年々増加傾向を示し，1951年74,374人となり，48.6%の増加率を示してピークに達した。60年代にはいって引続き急増し，1967年132,107人となって全人口（601,448人）の22%を示している。

この数字は北ボルネオにおける中国人社会が最大の移民コミユニティを形成したばかりでなく，種族集団としてもケダヤン族（178,376人）についで第2位の地位を占めていることを表わしている。この増加の理由としては，早期の移住者グループに促進されて現在もなお高い増加率を示していることによる。したがって，土着原住民人口と対比するとき次表（第2表）のように中国人人口のきわめて急速な増加率を窺知することができる。

第2表　中国人と土着原住民の人口増加比率　註 (1)

	1931～1951年	1951～1960年
土着原住民	18.4	26.1
中国人	40.6	40.6

第3表　中国人人口の年次増加と百分比　註 (2)

年次	人口数	増加率（%）	全人口に対する百分比（%）
1871	7,156		
1901	13,897		
1911	27,801		
1921	39,256	41.2	15.0
1931	50,056	27.5	18.0
1950	74,374	48.6	22.3
1960	104,542	40.6	23.0

中国人の分布状況は平坦な配分ではないが，北ボルネオの中国人のほとんど半数がゼセルトンとサンダカンの両地方に居住している。彼らは小規模商業の多数と熟練技工部門を支配している。この都市集中化の特徴は，中国人総人口の約65%がゼセルトン，クダット，サンダカンおよびタワオの4主要港および都市中心部に集中している現実がこれを物語っている。サンダカンは北ボルネオ最大の都市であり，また，ホンコンとの接触の主要地点である。中国人が北ボルネオの中で一番高い集中率を示したのは，サンダカンが歴史的に言って，早期中国移民の移入港であったという事実によってそれを特徴づけることができる。

しかしながら，そうは言っても，この中国人の都市集中的傾向だけを余り誇張しすぎては北ボルネオの華僑社会の全体の反面を見落すことになる。なぜなら，北ボルネオにおいて中国人の都市集中は実際的には数のうえでは約46%にすぎないのであって，残余の大部

分が彼らの住居の近く，もしくは都市周辺において農業に従事し，ゴム園の所有者として小経営（smallholdings）を行なったり，或いは自作農民となり，米作のほか野菜の栽培，豚，鶏など家禽類の飼養に従事するものが多い。

中国人の多数入国は歴史的には，1880年代に溯るが故に，現在では各地域に散在する結果になっているが，しかしなお彼らは完全に同化しきれないで，中国農村社会から持ち込んだ自己固有の慣習と言語とを保持し続けている。

ここで注目されるのは，彼らのこのコミュニティ[(3)]内部での慣習と言語の問題である。とくに言語に関しては，各出身地別ごとに方言を保持していることが，中国コミュニテイの構成上の多様性を生む要因となっている。東南アジア一般にも共通する現象であるが，華僑居住の85%までは華南の主要省（Provinces）に起源をもち，方言の相違によって福建・広東・潮州・客家の各語族（linguistic groups）に分類せられる。北ボルネオの場合においては，如上の4語族のほかに海南島が加わり，この5語族をもって，中国人コミュニテイの91%を占めている。各語族をグループ毎に示せばつぎの通りである。

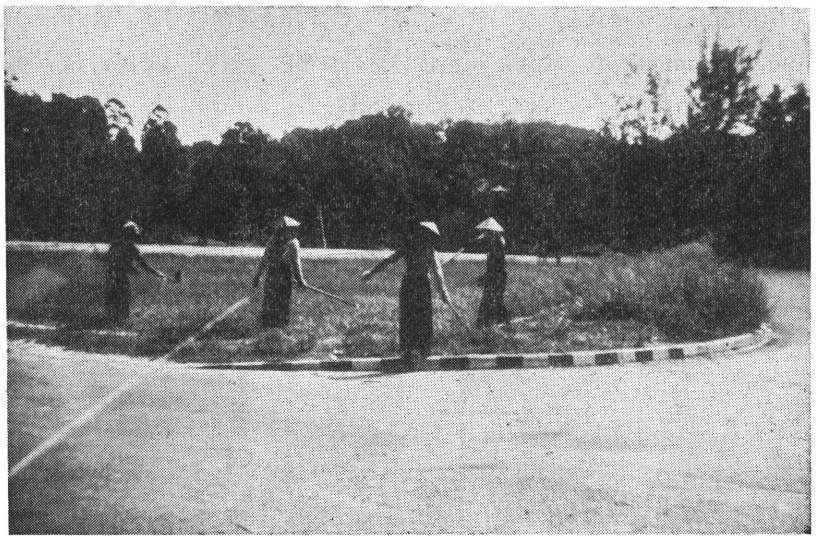
第4表　中国人コミュニテイの語族別分類

グループ＼年次	1951年		1961年	
	人口数	配分比（%）	人口数	配分比（%）
客家	44,505	59.9	57,338	54.8
広東人	11,833	16.0	15,251	14.6
福建人	7,336	9.8	11,924	11.4
潮州人	3,948	5.3	5,991	5.7
海南島人	3,571	4.8	5,270	5.0
その他	3,181	4.2	8,768	8.5
計	74,373	100.0	104,542	100.0

（出所）　Lee Yong Leng; North Borneo (Sabah) -A Study in Settlement Geography, 1965, p.65.

第4表において目立っている現象は，客家が圧倒的に多数であることである。彼らは大部分が農業に従事し，農業地域の中核を形成している。また，都市居住のものも含まれているが，それは早期移民の当時入国したものである。北ボルネオの初期の移民計画はすでに見たように農業中心の移民が奨励されたので，客家の農業労働者の入国が他グループを圧してとくに農村地域に拡散した。こうして中国人が都市よりも農村地帯で勢力を確立したことは，他の東南アジア地域と比較して全くユニークな存在である。したがって，言語面からいえば，客家の方言は他グループを圧倒して北ボルネオの混合語（lingua-franca）となっている。

広東人は客家に比較すれば数的に甚だ劣っているが，その居住地域は主としてサンダカン，ゼセルトン，トウアラン（Tuaran）およびタワオなどの港町に多く，福建人，潮州



客家女子労働者　（筆者撮影）

人と混在しながら都市居住者となり，大部分が実業家や商店主である。客家以外の3語族は中国人商業人口のバックボンを形成しているけれども，かなりの数の広東人はまたエステートの雇用人となっている。

ゼセルトン中国人街　（筆者撮影）

海南島人グループは少数であるけれども，都市でのサービス業，飲食業，コーヒー店などの同業者が多い。ゼセルトンにおいて，中国人コミニテイのなかで異色の存在は，華北から移住した少数の山東人がいるが，これは東南アジア居住の語族群の主流からみればまさに例外的であり，V．バーセルの言葉を借用すれば "a tiny freak pocket" 的存在である。彼らはほとんどゴム園の小経営者である。

以上は北ボルネオにおける中国人コミニテイの語族による基礎輪郭を描いたものである(4)

が，これを北ボルネオ経済との関連において言及すれば，中国人コミュニテイの本質はつぎのような形態のもとに展開される。

つまり，ボルネオ経済の根幹は世界市場向けのゴム生産であり，換金作物生産指向型の農業経済を特徴としているだけに，富の主たる源泉は，ゴムの生産であり，これは，あらゆる段階で中国人が主導権を握っているといっても過言でない。彼ら中国人たちは，生産者であり，少数のヨーロッパ人の集団と土着原住民の大多数との間の経済的地位の中間に位置し，小規模な商業資本家ともいうべき役割を果すのである。その結果として生ずる財力・富のヒエラルキーおよび中国人コミュニテイの富の結果において生じる身分，地位は職業と方言グループにきわめて近いものになっている。したがって，社会ピラミッド構造の幅広い底辺の部分には，農村地域の小さな保有地をもつ，いわゆる小農経営（Small-holder）の農民である客家がその場所を占めているのに対して，都市地域に住む広東人や福建人は資本投資への機能をもつ社会集団として不在所有権の基礎のもとに，より大規模なゴム・プランテーション（またエステート）を経営する仲買人や輸出業者として，ピラミッドの中間層ないし上層部を占めているのである。

ゴム産業の周辺にあって稼ぎ高の低い職業別グループや地位には，都市生れ（僑生）の事務員，職人，教師それに方言（語族群）にとくに関連をもたない労働者が含まれるのである。

したがって，これを階級面から考察してみると，中国人コミュニテイはつねに２つの基本的な文化社会グループ（Socio-Cultural Group），もしくは階級に，すなわち，農村地域における階級と都市地域における階級の２つのグループに分類することができる。

農村地域の階級は，特定の方言によって分類されたグループ，つまり，客家語を話す客家そのものと一致するのに対し，都市地域での分類は，いくつかの方言によって分類されるグループ，すなわち，広東人とか福建人とかに分けることができる。彼らはこうして各人は基本的な階級の中にあって，順次，相対的な富の線に沿って階層をなす傾向がある。この意味では，中国人の居留地での生活 Pattern は，主として彼らの出身地と相関関係にあるともいえるであろう。

しかしながら，現在の農村地域の社会経済的情勢は，富や土地所有関係の差異によって，ローカリテイとか，血族関係などの連りが漸次稀薄となりつつあって，その結果は派閥主義が抬頭し，価値の再編成が行なわれようとしている。つまり，農民が経済的尺度を上昇させて行くにつれて，都市地域の規範（Norm）が次第に支配的となり，都市居住への完全な移行，それにともなう生活様式の変化などが行なわれるようになったが，とくに都市の中でも，客家人たちは広東人や福建人などのエリートたちとは別に，商人や不在地主という「中産階級」へと質的転換をとげつつあることは注目される。しかし，こうした客家農民の都市居住への完全な移行および商人や不在地主の形態においての中産階級的質的転移過程は，客家農民の現地農村地域に歴史的に扶殖された農村支配の確立と，したが

ってまた土着原住民たちの搾取に基礎をおく本源的蓄積を前提としていることはいうまでもない。かかる現象は中国人コミュニテイ内部の今日的現象としてその問題を捉えることはもちろん大切なことであるが，ここではこうした階層分化の仕方がかなり人種的な線に沿って進行している点に着目するならば，わたくしはむしろコミュナリズムの観点から，階層分化の基礎条件をマレー人・原住民社会対中国人の搾取関係のなかに求めたいのである。それに関連して想起されるのは，現マラヤ大学アジス教授（U.A. Aziz）のつぎの言葉である“マレー人農民の貧困の原因は搾取である。貧しい農民に信用で品物や金を貸し，高い利子を取る者がいる。それは主として商人（華僑）であるが，借金ぜめにあった農民は結局土地を取り上げられる。マラヤには土地保留法（Malay Reservation Laws）があって米田を非マレー人である華僑は所有できないことになっているけれども，形式はともあれ実質はどうにでもなる（つまり名儀はマレー人でも実質は華僑所有ということも可能である）。こうして負債に悩むマラヤ農民はますます貧困となる”と。

北ボルネオの場合，このマレー人，原住民に対する搾取の問題は，実際上は中国人高利貸にたいする非難の形で指摘されるだけに終った。[(5)] すなわち，政府は彼らの搾取活動に規制を加える法律を制定したが，その実施効果は，その他の東南アジア諸国で実施しているようにはあがらなかった。たとえばローンの利息についてみても，最高は1ドルないし以下の貸付けに対して10%，10ドルないし以下の貸付けでは7%となっているが，これを法定利息最高4%まで引き下げるように意図されたにかかわらず，実施されなかった。

このようにみてくれば，北ボルネオにおける客家農民の中産階級的上昇への質的契機[(6)]は，まさに中国人農民によるマレー人・原住民搾取という犠牲のうえに築かれたものといわざるをえない。コミユナリズムのよってきたる根源には，こうした民族間の搾取関係に大きな原因の1つがあることを見逃せないであろう。マレー人の立場からすれば，外国人である中国人が，いわゆる“土地の子”である自分らの経済生活形態の中に介入したことによって，その農産物や手工業品は安く買いたたかれ，生活用品や若干の生産資材は高く売りつけられ，そのために生じた借金には高い利子が支払わされ，或いは土地を奪われて高い小作料を吸い取られるという被害者的立場の矛盾が看取されることになろう。それ故に，彼ら中国人は1つの伝染病よりも害毒を流し，マラヤ人民の寄生虫であるから，われわれの受取ることのできる最大の利益は，彼らを排除することである，と考えるような排他的な民族的感情がその間隙（かんげき）にはいり込むことになる。華僑が一面に“抜け目のない”（shrewd）“けち臭い”（stingy）そして“どん欲”（grasping）であるといった言葉で特徴づけられているのは，まさしく如上の排他的感情の露骨な反映にほかならないのである。

さて，再び記述をもとに戻して明らかにしておきたいことは，中国人の異族結婚（Intermariage）と混血児（Peranakan）問題についてである。

中国人が土着原住民と異族結婚を行なったのは先きにも触れたが，その割合は移民の行

なわれた時代によって変化している。つまり，男女の入国比率がアンバランスを欠いていた初期の時代には，このような結婚がもっとも多く行なわれていたのである。

農村地域のグループに較べて，都市地域のグループの異族結婚の割合は，いつも違っている。つまり，広東人や福建人の大部分が港湾都市地域に定着したことと，男性対女性の比率という問題と，移住地での言語の問題および経済的（商売上）のつながりを促進するという考え方から，土着原住民の中から妻を選ぶケースが多かった。他方，たとえば，1922年代から38年代の間に移住した中国人のうちには，大部分の人びとが家族単位で渡航するか，或には男性移住者が渡航後に妻を呼びよせ，または親戚の女性が渡航するといった場合が多かったので，農村地域に居住している客家たちの間では，同種族間で行なわれる結婚というのは少なかった。

今日では，中国人コミュニテイのうち，農村地域でも，都市地域でも同様に，同種族間での婚姻というのはとるに足らない要素になっている。という理由の１つは，同種族間の婚姻は経済的事情により，身分的にも低いという現実の関係を反映することになるからである。また，理由の２つには，同種族グループという限界内において，受け入れ可能な伴侶を発見しなければならないという条件が，これを困難視しているからである。さらにその他の理由としては，現在でも北ボルネオには中国本土で生まれた世代の人びとがまだ生存しているために，彼らはどちらかの一方の種族グループの中に統合されていて，区別された文化社会的グループを構成するほどまでに社会的分解過程が進行していないからである。

また，それだけに中国人の伝統とまでになっている“血統主義”（Jus Sangunis）によって，同種族間の婚姻によって生誕した子弟たちは，中国人として育てられ，教育されるという傾向も弱められずに強くなっている。こうした意味において，混血児の場合も同様なことがいえるであろう。

つまり，彼らの現実の生活過程においては，生まれつきよりも，むしろ，財力（富）が人間の身分を決定する傾向が強いので，裕福な条件のもとで生れた混血児たちは，「純粋」な中国人たちと結婚するケースが多く，中国人コミュニテイにあっても，これについては何らのハンディキヤップを感じない慣習にまで成長している。したがって，彼らの子孫たちもまた，そのような場合には「純粋」な中国人であるという考え方が何らの抵抗も感ずることなく流通している。このことは，まぎれもなく，人種的実在の永続という見地からすれば，重要な意味をもつと同時にコミュナリズムの払掃し得ない根源も華僑社会のこうした種族関係の中に内蔵されていることを認識する必要があろう。

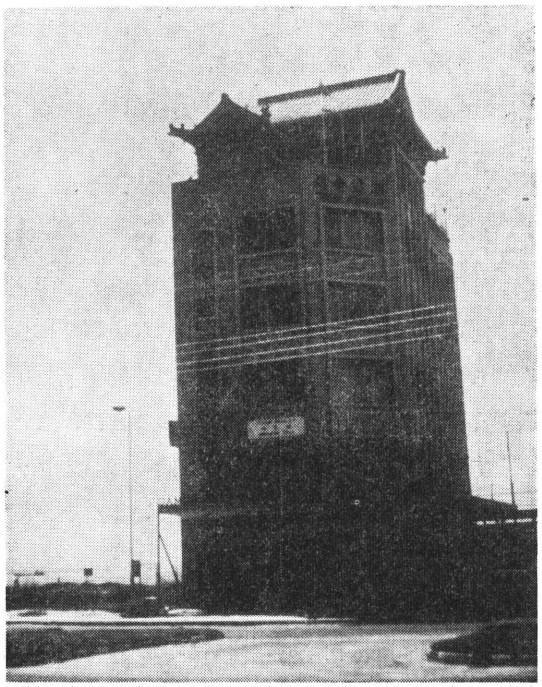
(3) 華僑の幇問題とマレー人関係

中国人社会に特有の幇（Pang）は，外部社会に対しては，華僑の自衛組織として機能し，内部関係では社会的な団結および連帯という機能によって，多様な個性をもつ１人ひとりが共通の全面的な目標を果すための相互扶助もしくは相互援助ということで理解され

ている。この考え方に立つ団結の強固さと排他的閉鎖性とは現地居留社会に容易にとけ込まうとはしない異質社会をつくり出す結果になっている。これは現地社会から反感を買い摩擦をおこす一因となった。

ゼセルトンの瓊州会館（筆者撮影）

戦後，東南アジア植民地から独立した各国においては，幇はコミユナリズムとナシヨナリズムの攻撃の対象となっている。北ボルネオの場合もその例外ではない。この意味で幇の存在はいろいろな批判の対象となり，問題となるが，現状の傾向では幇が中国人コミユニテイの団結の基礎として，歴史的に機能してきた役割を振りかえるならば，幇の改革はたとえば，シンガポールの中華総商会の1965年および1968年７月の規約改正の提唱にもかゝわらず，なお今日までその実現をみない事実上の現実は，幇の改革がむしろ新しい装いと再編成過程を通じて幇派強化の目的に利用されようとしていることを窺知せしめるものである。北ボルネオにおいては，華僑社会[(7)]には法律上の政党というものは存在しない。また行政レベルには選挙で選ばれるような官職もない。祖国中国との政治的利害関係は，イデオロギー的というよりも，むしろ，ナシヨナリテイックな傾向が強い。農村地域社会のレベルでは，選挙によって選ばれる「教育委員会」が一寸した政治的行動の焦点となっているのに対して，都市地域においては「中国人商業会議所」が中国人コミユニテイの最大


サンダカンの中華総商会　（筆者撮影）

の権力の中核となっている。首都ではすべての商業会議所支部の連合会が，最近結成され，中国人コミュニテイ内部の幇の結集と統一を約束するといった状況のもとに，幇の勢力はシンガポールと同様その衰えをみせていない。最後に，ここで華僑とマレー人との関係について触れておきたい。

華僑とマレー人との関係は，地方によって異るが，何れもいくつかの摩擦は免れない。金持ちが余り好かれないのは何処でも同じであるが，マレー人は表面上はどうであろうとも，内心では富裕な種族である華僑を嫌っている。マレー人も土着原住民も華僑を資本家だと見なしている。その反面，ヨーロッパ人に対してはそうは思われていない。なぜなら1967年の北ボルネオ人口の推定にもみられるように，華僑人口の132,107人に対して，彼れらは2,362人という極少数[(8)]の集団であって，その勢力は華僑のそれに較べてほとんど気につかれない程度だからである。

華僑はときに　マレー人および土着原住民との取引きにおいて，非常に苛酷だとのそしりを免れないようなことがあるが，もし，そのようなことがない場合でも，それらの行動がマレー人社会の悪感情を醸し出す原因になっている。

しかしながら，全体的にみるならば，種族間の関係はかなり良好であり，交易中心地やその他人びとの集まる場所においては，マレー人・土着原住民にたいして深い同情と理解をもつ華僑も存在し，彼らの言語を流暢に喋り，マレー人・原住民との間に完全な相互理解と信用とを克ち得ていることも見逃せないであろう。このような環境のもとに発想せられている「政党」的な連合形態もある意味では，一線上におかれた一種の異族間妥協ともみなしうるのであるが，この問題は別途稿を改めて論及されなければならない。

註 (1) Lee Yong Leng; opcit., p.61

(2) Lee Yong Leng; Ibid., p.63

(3) Lee Yong Leng; Ibid., p.64

(4) V. Purcell; The Chinese in Southeast Asia, 1951, London,. p.656

(5) 松尾弘「マレイシア経済開発問題の基本」昭和44年7月，明治大学「政経論叢」第37巻第3・4号，12ページ

なお付言しておき度いのは，Aziz 教授は日本留学生として早稲田大学にて農業経済政策を専攻したマレー人唯一の大学教授であり，マラヤ大学訪問の日本人には何時でも心よく接待してくれる。その一人としてここに感謝の意をこめて特記させて頂いた。

(6) V. Purcell opcit., P.436

(7) 幇（Pang）は幇集団の内部結束を固めるため前近代的共同体観が支配的であるが，その反面，幇の集団利己主義，幇同士の排他性が強い。したがって幇の改革を志向しその解消の動きを象徴的に示しているのが，各幇の頂点に立つ「シンガポール中華総商会」（会員2,500人，87団体）の動きである。この改革案はこれまでの幇派体制を廃止して広く指導的人材を大選挙区制の採用によって求めようとする組いであるが，それには賛否両論があって1965～1968年7月までの数次の会議によっても結論がでかねている現況である。むしろ，幇維持論

の方が有勢であって，その主張はつぎの３点に集約できる。

第１は，従来の幇派体制を廃止してしまえば，小幇の代表がなくなる恐れがある。

第２は，そうすれば党派間の争いを激化して華僑社会の統一は乱れ大分裂を引起す可能性がある。

第３は，それ故に，当面暫らく幇派制度を保留し，適当な時期に再び幇派の廃止問題を研究すべきである。

というのであって，大勢はむしろ幇の新しい装いのもとに再編成強化の方向にさえあるといえる。

(8) Malaysia Year Book 1971, p.463